

宝満山のホマンとハナの十六詣り



作・まえだ つとむ

写真・宝満山ヒキガエルを守る会

「やっと池についた」

お母さんがエルは、ホッと一息つくと、チャポンと池の水に入り、体を浮かべました。

「極楽、極楽」

宝満山からはるばるこのふもとの池までやってきたのは、大切な卵を産むためでした。宝満山で暮らすカエルはみんな山すそにある池で生まれます。そしてオタマジャクシになって、足が出て、小さなカエルまで成長すると、今度ははるばる頂上まで登って帰っていくのです。

「ここで暮らせばいいじゃないか」

池で暮らすゲンゴロウやアメンボウたちが言いますが、やっぱりみんながいる宝満山で暮らしたいのです。

無事に卵を産んだお母さんがエルは、すぐに宝満山に向かって帰り仕度をはじめます。ですから、その後に卵から生まれた子供たちは、お母さんの帰ったあとをたどるように宝満山に向かうのです。豆つぶくらいの大きさですが、小さいながらもカエルの形まで成長したら、お母さんのかすかな匂い



を頼りに、ちょこん、ちょこん、と跳ねたり、小さな足で一步、一步と山道を登ったりしながら、はるかに遠い宝満山の頂上をめざして旅をはじめます。

「早くお母さんたちに会いたいな」

卵から無事に生まれたホマンも、こうして頂上に向かって、小さな仲間たちと旅立ちました。毎日、少しずつ険しい山道を乗り越えていきます。

小さな段差を越えるのに半日かけ、山が乾燥すると落ち葉の下でじつとして、いっしょに頂上をめざす仲間と一緒になったりわかれたりしながら、ホマンは頂上をめざしました。満月の夜が三日月になり、また満月になった頃、どうにか宝満

山の頂上が遠くに見えるところまでたどり着きました。

池があるふもとはには村が広がっていました。自然豊かなその村には十六詣りという習わしがありました。その習わしは女の子が大きくなって十六歳になると、宝満山の頂上まで一人でお参りするものでした。そして無事に登り終わって帰ってきたら、一人前の女性とみなされてお嫁さんにいくことがで



きるのです。昔は十六歳でお嫁さんにいくこともよくありましたので、村の娘たちは十六歳になると、きれいな着物で身支度しては宝満山をめざしました。

村に住むハナも十六歳を過ぎていたのですが、両親が早くに亡くなり、おじいさん、おばあさんに育ててもらっていましたが、りっぱな着物の準備などが必要な十六詣りにはハナはいけないとあきらめていました。ハナはきやしゃな体でしたが、明るく元気で、村の娘たちの中で一番の働き者でした。おじいさんとおばあさんは、そんなハナのために生活を切り詰めながら、そっと十六詣りの準備をしていました。

ある日、ハナが畑仕事から泥だらけで帰ってくると、家の中に十六詣りのためのきれいな着物が飾ってありました。二人がどんなに無理をしたかわかっているハナは、ありがとう、と何度も言いながら、ほろほろと涙を落としました。

その日の夜には早々に準備をすませたハナは、翌朝の夜明け前に、

「行っておいで。頂上までは険しいから気をつけるんだよ」

見送ってくれる二人に何度も手を振って、ハナは宝満山を目指めざして出発しました。ホマンが出発して一ヶ月あとのことでした。

よいしょ、よいしょ

声を出しながら、ハナは山道を一步、一步と登っていきます。想像以上に険しい山道が続く、せつかくのきれいな着物もあちこち泥がついてしまいました。そのうち時おり雲の合間からのぞくお日様もずいぶん高くなってきました。少し急がないと、頂上にたどり着いた後の帰りが、明るいうちに村までたどり着けなくなるかもしれません。

「もう少しがんばってから、一休みしよう」

そう口にして休まないで足を進めていたハナでしたが、竹筒の中の水も切れてしまったので、水くみのために沢を見つければと山道から外れると、そのうち道に迷ってしまいました。

「困ったな、どうしよう」

ハナは不安になりながら、何か登山道の目印はないかときよろきよろしているうちに、足を踏み外して山はだを滑り落ちてしまいました。



「いたいっ。足をくじいた」

ハナは足首を手で押さえ込んだまま座り込んでしまいました。

神聖な山である宝満山の頂上には、昔からずっと神さまが住んでいて、いつも頂上から周囲を見守っていました。山を登ってくるものの姿が目に入ると、

「よしよし、元気に登って来よるわい」

とうれしそうに楽しみに待っていました。ハナの姿も見守っていましたので、神さまは足をくじいたハナに、救いの手を差し伸べてあげようと思いました。

「いつも一所懸命働いているハナには、気持ちよく頂上まで登ってきて欲しいからな」

山を見渡してみると、ちょうどハナの近くを登ってきていたホマンが目に入りました。宝満山に住むカエルたちは、頂上に住む神さまのお供の役目も担っています。ホマンは頂上に向かって登っていきながらどんどん成長して、もう若者のカエルになっていました。そこで神さまは、

「ホマン、今頂上に向かっているハナという娘を手助けしておくれ。ハナは今、足をすべらせて沢のそばで動けないでおる。今から人間の体にしてやるから、ハナが頂上まで登ってくるのを手伝って

くれないか」

そう言って、持っていた杖を一振りしました。すると、ホマンは小さなカエルから人間の青年へと変わりました。

「うわあ、二本足でどんどん歩ける。こりゃあいいや」

小さなカエルから大きな人間になったホマンは大喜びです。あれほど苦勞した段差もひとまたぎで越えられます。さっそくホマンはハナを助けに向かいましたが、カエルの時とは比べものにならない速さで進めましたので、すぐに、動けないでいるハナのそばまでたどり着くことができました。様子をうかがうと、沢のそばで可愛らしい娘が足をさすっていました。ホマンは一目でハナのことが好きになりました。

「だ、大丈夫か」

ホマンが上ずった声で話しかけました。その声にびっくりしたハナが振り返ると、そこにはりりしい顔つきの青年が立っていました。

「どなたですか？」



「ホマンと言うものだ。ケガをしているようだから、助けに来た」

内心どきどきしながらも、ホマンはぶっきらぼうに答えました。

「ありがとうございます。助かります。足をくじいてしまって」

ホマンはハナの笑顔にドキドキしながら、ハナの白い手をにぎって立たせ、そのまま、よいっしょ、とハナを背中におんぶしました。きゃっと声をあげたハナのことを気にならず、ホマンは沢から上がり、山道を大またでどんどん進みだしました。しばらくすると、足の痛みが治まってきたハナが、もう大丈夫ですから、と背中から繰り返すので、ホマンはハナをそっと降ろすと、手を引きながら山道をゆっくりと進みました。手をつないだホマンを見つめながら、ハナはきつかった山道が急に楽になったように感じました。ホマンも、大丈夫か、きつくないか、と照れながら声をかけては、うれしそうにハナの手をにぎり、神様が待っている頂上まで足を進めていました。

「ほほえましいのう」

そんな様子を、ニコニコしながら、神さまは頂上から眺めていました。

「ホマンさん、きれいな花が咲いていますよ」

「ハナさん、そこはすべるから気をつけて」

いつの間にかホマンとハナもすっかり打ち解けて、ふたりで楽しげに頂上をめざしていました。そのうち、

「あ、ホマンさん、頂上が見えました」

うれしそうに言ったハナの顔を、ホマンはしばらくまぶしそうに見つめてから、少し悲しそうな顔で頂上に目をやって、

「無事にたどり着いてよかった。じゃあ」

と言うと、さっと草やぶの中に消えてしまいました。

「あっ」

ハナが、ありがとうございました、という言葉をかける間もありませんでした。

草やぶの中に入ったとたん、もうホマンは、元の小さなカエルの姿に戻ってしまっていました。

「ホマン、ごくろうじゃった」

「お役に立ててよかったです。とても楽しかったです。でも、胸が苦しくて、なんだか悲しい気持ちです。どうしてなのでしょう？」

「わっはっは、それはな、ホマンがハナを好きになってしまったからじゃ。気持ちはわかる。あんな

いい娘がお嫁さんになってくれたら、毎日楽しかろうなあ」

神様は愉快そうにそう言いました。

「神さま、私をもう一度人間にしてください。そしてハナさんをお嫁さんにさせてください」

「いやいや、それはとても無理じゃ。おまえは宝満山のカエルとしてりっぱに生きていきなさい」

「ハナさんのことはこれからずっと忘れられそうにありません。神さまの言いつけの通りにがんばって、そして好きになってしまったのに、今さらだめなんてあんまりです」

ホマンは泣きじやくりました。神さまは、困ったことになったな、と思いながら、

「そこまで言うなら、おまえがカエルの姿のままでハナに結婚を申し込んで、それでもハナが受け入れてくれたら、人間にしてやろう」

神さまはホマンをあきらめさせようと思ってそう言いました。

「わかりました。では頂上の岩の上で結婚を申し込みます」

「いやいや、ホマン。やめておきなさい」

いちずな思いのホマンに神さまはまいってしまいましたが、いくら何でも、ハナはカエルの姿のホマンの結婚は受け入れまい、と考えて、そのまま好きにさせることにしました。

ハナはというと、宝満山の頂上までたどり着いて、頂上からの素晴らしい風景やはるか眼下に見えるおじいさんとおばあさんが待つ村を眺めていました。

「なんて、すてきなんでしょう」

ハナは汗をぬぐいながら、一息ついていました。

「あの、ハナさん・・・」

そんなハナの後ろから、カエルに戻ったホマンが話しかけました。その聞き覚えのある声に、

「よかった、ホマンさんですね。先ほどはお礼も言わずにごめんなさい。もう一度お会いできてうれしいです」

ハナはそう言いながら、ホマンの姿を探してあたりをきよろきよろと見まわしました。しかし、どこにも姿は見えません。すると、

「あなたの足元にいます」

その声に、ハナが自分の足元をよく見ると、そこに小さなカエルが目をくりくりとしながら、見つめているのに気がつきました。

「まさか、あなたがさっきのホマンさんなの？」

ハナは驚いた顔をしながらも、手のひらにそっと、小さなカエルに戻ったホマンを乗せて顔を近づけました。ハナの美しい顔をまじかで見たホマンは突然、

「ハナさん、オレ、すっかりあなたのことが好きになりました。お、お嫁さんになってください」

すっかり舞い上がったホマンが、いきなり結婚を切り出しました。様子をそっと見つめていた神さまは、あまりにせっかちなホマンに思わず吹き出しましたが、

「私をお嫁さんにしてくれるの？」

そうハナが恥ずかしそうに言った後に、いいですよ、とうなずいたので、

「ええっ、ほんとにいいのか？」

思わずそうハナにたずねたのは、ホマンより先に神さまの方でした。急に現れた神さまの姿にびっくりしているハナの肩に、ぴよんと飛び乗ったホマンは、神さまにさっそく、

「約束ですよ」



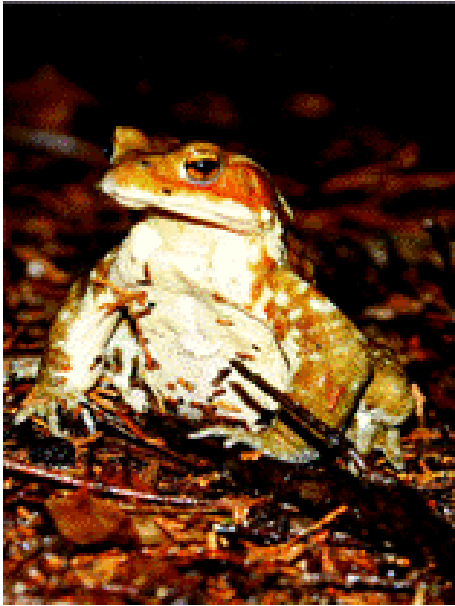
と大きな目をクリクリさせて言いました。

「わかっておるわい。それと、これはわしからの祝いじゃ」

そう言って神さまが杖を振ると、ホマンはりっぱな衣装を身につけた若者になり、その足元にはこれからの生活に必要な道具などがありました。

「ハナを大事にするんだぞ」

その声とともにすっと頂上から空に向かって消えてしまいました。その姿を見送ったホマンとハナは、もう一度しっかりと手をつなぎながら眼下にまぶしく見えている村に向かって宝満山を降りていききました。



令和元年五月二十四日 第二版

文章・まえだ つとむ（前田 勉）

昭和三十七年 鹿児島県生まれ、以後、山口、宮崎、福岡と移り、現在鹿児島県在住

これまでの作品

「空っぽのプレゼント」、「クレーンの先には」

「小さなクモが太平洋を渡る」（鹿児島市子どもたちに聞かせたい創作童話 入選）

「忘れ物グラフ」（アンデルセン童話 入選）

自主出版

詩集「真夜中のつぶやき」、小説「気配」

写真・宝満山ヒキガエルを守る会

十六詣り、ヒキガエルの写真などは、適宜、更新します。

宝満山十六詣りについては宝満山弘有会のホームページ（<http://homanzankouyu.sunhouse.in/index.php>）を「J」

覧ください。令和元年は四月十四日に行われました。